

・薬学部の学費

薬科大学（薬学部）の学費等の納付金は国立、私立等で差がありますが、私立薬科大学の平均を見ると、初年度二百二十万円、二年次以降は年額二百万程度で、**六年間では千二百万円程度**が必要です。そのほかに委託徴収金、後援会費、学友会費等が別途かかります。

・6年制

四年制時代には、国家試験に合格しても必ずしも薬剤師免許を必要とする職種に行くとは限りませんでした。六年制で臨床薬学を修めた薬剤師であっても、免許を必要としないステージはありますが、その場合、四年制時代の**修士課程修了者とおなじような待遇にせざるを得ず、おのずと門戸は狭まってくる**。病院、調剤薬局、あるいはドラッグストア等での医療現場に限定される傾向が強まります。

・薬剤師不足

結局、調剤薬局、ドラッグストアにとってここ数年は薬剤師不足に悩まされそうです。ただ、待遇はどうかといえば、薬剤師にとって売り手市場ではあるものの、大きな期待は難しいのが現状です。アメリカでは薬剤師の年収一千万円が相場ですが、**日本では五百〜六百万円**で推移しています。もちろん処遇の程度は企業により異なりますが、全体の底上げには、医療への貢献度を高め、薬剤師の社会的地位を一層向上させることが必要です。

<調剤薬局の経営実態>

コストで医薬品の次に多いのが薬剤師の人件費です。

日本の場合、**薬剤師が一日に調剤できる処方せん枚数は四〇枚**と決められており、四〇枚を1枚でも超えれば二人必要です。現在、調剤薬局は薬剤師不足に悩んでおり、とくに地方では深刻です。そのため手当を増額したり、住宅を用意したりと様々な確保策を採っています。

アメリカのようにテクニシャン（調剤助手）制度を認め、薬剤師の業務改善を図ることを検討すべき時期にきています。

・薬剤師過剰時代

薬剤師過剰時代へ――。数年前から薬剤師過剰時代の到来が囁かれるようになりました。**薬剤師免許さえ持っていれば、一生安泰という時代の終焉**です。どうやらそう遠くない将来には現実になりそうです。

実は、数値の上ではすでに薬剤師の供給が需要を上回っています。厚労省の「薬剤師需給の将来動向に関する検討会」が二〇〇七年にまとめた報告書によると、〇七年時点で八万人が供給過剰（無職者を含まない）となっており、今後の予測では二〇一四年には八万五千人、**二〇一八年には十万人が供給過剰**になると報告しています。

薬局の需要状況では、二〇二八年に十四万一〇四一人と予想、十一年度比で七千人程度の需要しか見込ません。余剰となった薬剤師はどこへ行くのでしょうか。

ただ、調剤薬局やドラッグストアでは薬剤師不足が伝えられています。薬剤師の都市部集中、地域偏在などで需給バランスが崩れていることが要因です。とくに地方では慢性的な薬剤師不足に陥っています。

・・・

とくに考えなければならないのは、**六年制教育では臨床薬学教育が重視された結果、他の職種には行きにくい状況が生まれている**ことです。調剤薬局やドラッグストアへの供給がさらに増えることが予想されます。